

今月の人

平井憲夫氏に聞く

『インタビュー』江川紹子フリーライター

PEOPLE OF THE MONTH



原発被曝労働者救済の道を開く

原子力発電所で働く労働者たちの放射線被曝の問題は深刻だ。白血病にかかり苦しんでいる人、あるいは亡くなつた人……。しかし、それが原発で働いたための労働災害とは認められていない。原発被曝労働者救済センターは、そうした原発被曝労働者の救済の道を開こうと、弁護士、医師らが集まって結成された。代表世話を人の平井憲夫さんは、国が認定する一級プラント配管技能士の資格を持つ。長年化学プラントの会社に勤めていた後、日立製作所系の吉田溶接工業に入社。工事部次長として、東京電力の福島、中部電力の浜岡、日本原電の東海、敦賀など沸騰水型原発の建設・定期点検に、配管工事の監督として二〇年近く携わった経験がある。

「原発についてはいろんな人が本を書いたり、講演したりしていますが、実際に原発を見て発言している人はいないんじゃないでしょうか。私は現場を経験しているのでわかるんですが、世間に公表されている被曝事故はほんの一部で、労働者の被曝は常時起きています。私は会社を辞めてから、マスクで証言したり、いろんなところに講演を頼まれるようになりました。その会場、会場で、原発で働いたことのある人から相談を受けるんです。何とかしないといけないな、と二年ぐらい前から思っていたんです。でもなかなか踏ん切りがつかなかつた。その後、白血病で亡くなつたという方の遺族が相談にみえるようになって、話を聞いているうちに、やっぱり濟のためのセンター作りをしなくちゃだめ

だと決心したんです」

センター設立が全国に報じられたのが一九九〇年一月一日。以後約二〇日の間に三六〇件もの相談が殺到した。原発での労働と病気の因果関係が濃そうな人から順に、さつそく医師が手分けをして診察を始めた。

「労働者は自分のからだがおかしいと思つ
っていても、どこに行つたらいいかわからない
んです。相談は、まだまだ増えると思います
よ」

平井さん自身、白血球の数が上下するほか、全身の倦怠感、咳に悩まされている。インタビューの最中も、何度も咳をしていた。

被曝の事実を隠し通そうとする

「私が原発で仕事をしていた時、こんなことがありました。仕事の後、労働者はハンド・フット・モニターにパンツ一枚で入るんです。からだの内外の放射能汚染を計る機械なんですが、汚染されている場合には、シャワーを浴びてもう一度計るんです。外部の汚染はシャワーで洗い流せば、だいぶ落ちますから。でも孫請けのある労働者はそれでも汚染が残つていた。それで、その量を計るためにホール・ボディー・カウンターという機械にかけたんです。通常の生活をしていて人が自然に浴びる放射能は毎分一〇〇カウントくらいですが、その人はなんと五二万数千カウントもあつたんです。通常の五〇〇倍です。

労働者の被曝は當時起きている

よ。私はびっくりして、その人に医学的にどんな処置方法をとつたらいいかを聞きに行つたんです。ところが、電力会社はどうしても私に会おうとしないんです。しかも、被曝した労働者本人に被曝していることすら知らせない。ホール・ボディー・カウンターにかけのさえ、一人だと怪しまれるので、サクラを五、六人用意します」

――会わざじまいだつた電力会社の担当者と、
九九〇年はじめ思わぬところで会つた。

「市民グループに頼まれて、電力会社との公開討論に出たんです。その時にこの五二万

カウントの話が出た。すると当時の責任者た
いう人が、「私は、本人と業者の責任者を呼
んで病院に行くよう指示しました」と言う

責任者つて何という名前か覚えてますか? そしたら、『平井という人だ』だつて。そういう嘘を言うんです。私が、『私があんたに会いたいと言ったのに、逃げ回ったんじゃないか』と指摘したら、下を向いていました。

事故が起きると始末書と報告書を書いて電力会社に提出するんです。私も何度も書きました。電力会社は国や地元にも報告しなくてはならないはずなんですが、それをしないことが多いんです。国会である事故のことが問題になりますね。電力会社はあくまで事故はなかつたと突っぱねたんですが、議員が始まふと報告書をパツと出した。それは私が書

いたもので、びっくりしました。そういう証拠を突き付けられるまで、認めないんですね。このような体質が一番怖い。国や電力会社に言わせると、被曝事故は一件も起こってない。だから、医者の診断書と労災の書類を持つて労働基準監督署に行つても、受け取らないんです。『前例がない』と言つて。しかも、労働省に放射線障害についてわかる専門家が一人しかいない。こんな状況なんです』

センターに寄せられた相談については、資料がそろった時点で労基署に労災の申請をする。拒否されれば訴訟を起こす構えだ。

被曝するのは、原発を止めて行う定期検査(定検工事)の時が多い。電力会社の社員は危ない場所には近付かず、被害に遭うのはもっぱら下請けの労働者だという。

「原発」というと、先端技術を持った人たちが作つたり検査したりしていると思うでしょう。でも実際は素人の集団なんです。いつもは農業や漁業をやっている人が、冬場に出稼ぎに行くかわりに、原発の孫請け会社に雇われているんです。これといった安全教育も施されていないし、資格も必要とされていません。原子力メーカーの指導員も素人。資源エネルギー庁の役人も来ていますが、この人も全く原発のことはわかつていません。形のうえではチエックは何重にも行われているようですが、結局は素人ばかりですからね」

P
今月の人

平井憲夫氏に聞く
『インタビュー』江川紹子

PEOPLE OF THE MONTH



いつ大事故が起きてもおかしくない

平井さんは、日本の原発でいつ Chernobyl ブレイ級の事故が起つてもおかしくない、特に古い原発があぶない、と警告する。

「化学プラントと比べて、技術的に遅れているんです。配管というのは人間のからだで言えば血管と同じです。その配管がとても危ない。例えば、配管がズレっていて溶接ができるものを、無理に引つ張つてつなぎ合わせるケースが少くない。古い原発では配管を支えるサポートが壁に着いているんですが、操業中の振動で、サポートが次第にグラついてしまう。サポートが配管にぶら下がっているような状態になつているところも多いんです。配管のこと落ちてしまう危険性がないとは

言えません。工事の途中で、労働者が工具を配管の中に置き忘れてしまったケースもあります。私のところにも高校生から『話を聞きました』とか、『原発は本当に大丈夫なんですか』という手紙も来ています。子どもたちは、大人が思つていてる以上に考えていますよ」

Chernobyl 事故以後、日本の原発も危ないんじゃないかといふ声が上がりましたが、国や電力会社は、日本のは Chernobyl りとは違う型だから大丈夫だという説明をしてきました。でも、現在日本で運転中の原発四〇機のうち、スリーマイルと同じ型は二三機もあるんですよ」

真実を、原発推進派にも知つて欲しい

平井さんと同時に退職した人たちと一緒に、会社を興した。しかし平井さんは、反原発の市民グループに招かれて全国を講演して回ったり、救済センターの仕事で忙しく、なかなか本業に割く時間がない。最近は特に、原発の建設が予定されている石川県珠洲市の市民グループの応援に力を入れている。

「原発の問題は、子どもたちをも巻き添えにしています。ある中学生は、原発問題を指摘した本の読書感想文を提出した。ところが校長が勝手に書き直しちゃつたんですね。その感想文を校内で発表する時に、その子は直される前のものを読んだ。途端に父母が呼ばれて、『内申書がどうなつても知らない。こんな素直でない子は見たことがない』と叱ら

れた。この種の事件はいくつ起きています。私のところにも高校生から『話を聞きました』とか、『原発は本当に大丈夫なんですか』という手紙も来ています。子どもたちは、大人が思つていてる以上に考えていますよ」

「どうにしている。だが、このように運動をしています。嫌がらせを受けたり身の危険を感じることはしばしば。講演会場に右翼の男たちが刃物を持って現れたり、街宣車で妨害されたこともあります。自宅の連絡先はきわめて親しい仲間にしか知らせないなど、警戒しながらの活動だ。『だって、誰かがやらなきゃならないことがあります。私は実際に原発を見て、知っています。やはり本当のことを原発反対派だけじゃなく、推進派の人にも知つて欲しいと思つてやつてているんです。原発は一度燃料を入れて運転を始めたら、壊せません。今の状態では、これ以上原発を作つたらダメ。今回作った救済センターは、そうした運動の一環になると想います』

事務は市民のボランティア、医師や弁護士も手弁当だが、活動費不足が悩みの種。広くカンパを募つていて。問い合わせ、カンパの送り先是次の通り。

郵便振替・横浜3-31873／名称・原発被曝労働者救済センター T254神奈川県平塚市花水台32-32-407 電0463-13580